日本経済新聞（夕刊）　2006年（平成18年）1月27日（金曜日）

夕刊文化

シネマ万華鏡

天空の草原のナンサ

深刻さ伝えず自然美活写

「天空の草原のナンサ」はモンゴル遊牧民の暮らしを描いたドキュメンタリー風の劇映画である。B・ダワー監督はドイツに留学して映画を学んだモンゴル人女性であり、本作はドイツ映画となる。

彼女の前作「らくだの涙」は昨年、ドキュメンタリー部門でアカデミー賞にノミネートされ、世界中の注目を集めた。ただしモンゴル国内ではあまり評価されていない。既に一九八七年、同じ名で同じテーマの純正モンゴル映画がモスクワの映画祭でグランプリを受賞しており、モンゴル人にとってはいわばリメイクにすぎなかったからだ。

彼女の存在意義は、モンゴル人の熟知する生活世界をグローバリゼーションの波に乗って世界中に知らしめた点にあると言えよう。本作も同様にモンゴル人にとっては見慣れた風景が活写されている。換言すれば、他者へのモンゴル紹介のための作品である。

原題は訳すと「黄色い犬の洞窟」で、モンゴル国アルハンガイ県にある火口地形にまつわる伝説に由来する。この伝説は、仏教を色濃く反映した伝統的世界観の象徴として映画の中でも登場する。

「洞窟」と訳された語はモンゴル語では一般に「地獄」を意味し、この世の罪を背負う言葉だ。しかしこの映画は、国土の約半分が外国系資本の利用権下にあるという深刻さや利権がらみで動く人間の貪欲さを伝えない。その代わり、草原に生きる遊牧民たちの高潔さを描いている。

集住せずに点在し、植生に応じて家畜を連れて移動し、自然環境保全型の経済として意義をもつ遊牧を人びとが選択してきたからこそ、草原は今日なお美しさを保持しているのである。人の生きざまによって担保されている自然美を世界中に知らしめ、その美の力によって祖国を守ろうとしているのだろう。

（国立民族学博物館教授　小長谷　有紀）

OS名画座ほかで公開中。